

# アサ

牧 幸 男

## はじめに

**アサ** (麻)は、中央アジア原産とされるアサ科アサ属で「大麻草」とも呼ばれる一年生の草本、雌雄異株である。麻という字の由来は、麻は、<sup>はい</sup> 杵と<sup>げん</sup> 苧を合わせた形で、杵は、麻の茎を並べて皮をはぎ取り皮を細く裂いて繊維にする意味で、屋根の下で、その作業をすることから麻という字が生まれたと言われている。わが国では従来「麻」と呼ばれていたが、明治以降マニラ麻など外来種が輸入されるようになると、国産の麻と区別するため「大麻」と言う名が定着した。しかし、現在わが国ではアサ全体を呼ぶようになった。麻の意味について前述したが、広義には類似の品種もさすこともある。主な大麻を列挙すると、タイマ Hemp (アサ科) の他に、チョマ Ramie (苧麻：カラムシ、イラク科)、アマ Linen、Aflax (亜麻：アマ科)、コウマ Jute (黄麻：ツナ、シナノキ科)、ポマウ (青麻：イチビ、アオイ科)、ナナフ (洋麻：アオイ科)、マニラアサ (バショウ科)、サイザルアサ (ヒガンバナ科) がある。

長野県内では、麻のほかに苧麻と亜麻がこれまで栽培されていた。写真は苧麻と亜麻の栽培写真である。



撮影：鬼無里 アマ (亜麻の栽培)



撮影：鬼無里 チョマ (苧麻の栽培)

アサ、別名大麻は、私達の生活になくってはならない繊維植物であった。しかし、化学繊維の普及ですっかり地位を失い、今では神事や伝統行事、一部で梱包材料の使用に限られている。一方、最近の一部の人達が大麻吸煙で逮捕されるなど、悪者の植物の印象が強くなっている。一部であるが世界では大麻を合法的にしようとする動きもある。

薬物に対する誤った情報の氾濫、娯楽目的での合法化を許容する総数の国々の動き、そういった情報を得たり、誰もがやっているのだといった根拠のない思い込み等が薬物乱用につながっているのだろう。今回の「薬草を楽しむ」では、大麻について詳しく紹介する。

大麻について述べる前に、大麻がどの様に使われたことがあったか、歴史上で使われた事実について触れたい。

## 1 大麻使用の歴史

歴史上最も古い記述は、ヘロトドス (BC490~480 の間に生まれ BC430~420 の間に死亡) 著『歴史』に「スキタイ人 (BC9~BC4 頃活躍した民族) は繊維原料として大麻草を栽培する他、灼熱した石の上で大麻草をあぶり、その蒸気を浴び、歓喜の叫びをあげる。」の記述がある。

次に、過去に大麻を使用した一つの事例 (暗殺者との関係) を紹介する。暗殺者は元々、シーア派から発生したイスマイル派と密接な関係がある。テヘラン西北の高山に 11 世紀頃「秘密の花」と呼ばれるイスマル教団系の豪華な城があった。周辺の寒村から屈強な若者を集め、花園で美女と乳と蜜の甘い生活を味合わせた後、元の貧乏な村に返す。茫然とする若者の耳に使者がささやく。「刺客になれば楽園に戻そう。」と花園行きに使われた麻薬ハシシこそ、暗殺者アサシンの語源となっている。大麻の歴史のひとつまでである。このような使用の歴史があったことを知ってから次に進む。

その他、インドやイランでは古くから大麻草の麻酔作用を知り、それを享楽にしていたが、この悪習はアラビア人の侵入と共にシリア、エジプト北アフリカに広がった。アラビア医学では医薬品として利用もあった。

ヨーロッパに乱用が拡散したのは、十字軍（1096~1303）の遠征後、特にナポレオンのエジプト戦役（1789）から帰還した兵士達と伝えられている。1900年代にはイギリスで医薬品として使用が始まったが、乱用されるようになるのは1900年代後半になってからである。

一方、アメリカでは1632年に伝播され、開拓者は繊維作物として栽培していたが、吸引する習慣はなかった。吸引の習慣は1910年頃メキシコ農民がもたらしたもので、1930年代には全米各地に広がり、その使用者の多くは黒人、ジャズ音楽家達であった。特に、1960年代頃からベトナム帰休兵や海外旅行者などによる自己吸煙が横行するようになった。

我が国では1950年代後半からわずかながら大麻を吸引するようになった。1960年頃にはアメリカでの大麻吸流行の影響を受けて乱用が目立つようになった。この流行は、大麻の使用が簡便であることや、外国から比較的安価で入手できたからである。

## 2 大麻の性状

アサ *Cannabis sativa* は南アジアや中央アジア原産のクワ科の一年生草本である。茎は直立し高さ1~3mぐらいに成長する。茎は鈍四稜形で細毛があり緑色である。葉には長い柄があって対生し、葉の縁にはそろった鋸歯あり、上面はざらつき、裏面は細毛が密生する。アサの生育地に近づくと草から発散する独特の臭気を感じ、少し酔ったような気持ちになる。夏に開花し、雌雄異株で、雄の株を梟麻、雌の株を苧麻と呼んでいる。秋に結ぶ果実は卵円形で灰色やや扁平である。茎皮は繊維等に利用して、種子を食用とする。学名は *Cannabis sativa* で、属名は麻に対するペルシア名 *kannab* から出たギリシア古名、種小名は栽培された意であるので、古くから栽培されていた植物であることが分かる。

## 3 大麻栽培の歴史

植物の学名でも分かるように人類が栽培してきた最も古い植物のひとつで、栽培目的は繊維と実を穀物として食用の目的であった。栽培は12000年前には中央アジアで始まり、急速に広まっていった。2019年の考古学的調査の集成からは、大麻の起源はチベット高原の青海湖周辺であると推定され、最初欧州へ次に中国東部へと広まったとされている。大麻栽培は早期から人類と共存してきた。そのため、現在では真の野生種は絶滅したと考えられているほどである。

### (1) 我が国の大麻栽培と利用

我が国では、縄文時代早期から前期（9500-10500）の時代の複数の貝塚から麻の果実（実）や縄が見つかり、栽培された可能性は高く、食用目的の他に繊維に利用されていた。弥生時代（BC3~3頃）になると、布はほとんどが麻製であったことが登呂遺跡の資料から明らかである。更に、その他の古墳からは荒妙（麻織物）だけでなく、現在絹で作られる和妙（絹織物）も麻で作られていたことが分かっている。

記録では『出雲風土記』（713）や『播磨風土記』（715）、『常陸風土記』（721）に麻に関する記述がある。この中で『播磨風土記』に「夜、麻を打つに、即て麻を己が胸に置き死せき。」（茎の繊維を取る作業においてしみ出た汁により中毒死）の記録がある。

身近な植物であったのか『万葉集』（629~750）には28首収載され、藤原 卿 は

**麻衣 きればなつかし 紀伊国の 妹背の山に 麻蒔く吾妹**

と詠っている。一方、神道では神聖な植物として扱われ、日本の皇室にも麻の糸、麻の布として納められている。『古語拾遺』（807年）に神道の祭祀で貢った品物の中に麻も含まれ『延喜式』（905~927）にも同様である。伊勢神宮の特に重要な祭典では、アサを頭に巻いたり褌掛けにしている。更に、神事の御幣、熨斗にはなくてはならない材であった。

江戸時代になると、木綿が一般庶民に普及し麻の地位が低下したことがあったが、農民の衣服はほとんどが麻の布であり、武士の袴はアサの布が使用されていた。

わが国で大麻栽培が盛んに行われていたことは、W・Sクラーク博士（1826~1886）が札幌農学校に赴任する前東京に滞在した際、下総の牧場を訪れている。その様子を彼の妹が「……低地は、イリノイ州のトウモロコシ畑のように目の届く範囲は全て田になっていました。高台には、サツマイモ、……(中略)……大麻、亜麻……等が植えてあるのが見えました。」と記録から分かる。そ日本で大麻栽培が盛んであったことは、地名に麻宇那、麻郷、麻畑、麻布、大麻、麻打、麻植塚等麻を冠した地名が残っている証である。

### (2) 長野県の大麻栽培

#### ア 大麻栽培者数

長野県下でも昭和30年代前半まで各地で麻が栽培され、農家の収入の助けになっていた。大麻栽培者は、昭和22年の栽培者数は

23,902人、昭和29年の栽培者数は37,313人であったが、昭和42年になると栽培者数は5,102人と化学繊維の普及に伴い減少している。長野県は古くから麻は主要な農作物で、県内には麻を冠する地名の麻績<sup>おみ</sup>、美麻、小谷（麻垂<sup>おたり</sup>）等が残っている。この植物が姿を消すことにより、栽培や製法過程で使われてきた言葉の麻蒔<sup>おまき</sup>、麻切<sup>おきり</sup>、麻束縄<sup>おたばつら</sup>、乾麻<sup>からそ</sup>、釜麻<sup>かまそ</sup>、麻煮<sup>おに</sup>、麻搔<sup>おかき</sup>、麻撚<sup>おより</sup>、麻剥<sup>おはぎ</sup>、麻積<sup>おうみ</sup>等の言葉が忘れられるようになった。栽培者は昭和40年代から激減したが、大麻栽培の技術を残そうとの動きもあった。鬼無里村（現・長野市）では見本園で大麻のほかに亜麻、苧麻を栽培し区別が分かるようPRをしたことがあった。また、麻績村では麻製品の技術を伝承しようと麻布を作り、ネクタイを販売したりした。しかし、大麻の盗難が発生しないよう栽培許可条件が厳しく、長続きはしなかった。ついに、長野県では平成30年度以降栽培者はゼロとなった。



撮影：長野県内 自生大麻は成長が不揃いである

その大きな理由は、アサの繊維使用が国内では全くなかったこと、栽培許可に対する厳しさ、栽培個所が大麻盗難のターゲットになるのを嫌ったためである。

一方で、大麻栽培が行なわれなくなると、放置された種子が生産地に近くの小鳥による種子の運搬などから、原野に自生大麻が県下各地に生育するようになった。大麻の種子の休眠時間が長く適度な光があると発芽する。このため、この自生大麻を放置すると年々増加するばかりでなく、この大麻を大麻乱用者が目に付けるようになり乱用につながった。このため自生大麻を抜去しなければならなくなり、毎年大麻の種子ができる前の6月に抜去するようになった。自生大麻は東信地区が多く、抜去本数は毎年膨大であった。このため県、保健所の職員や厚生省（現厚生労働省）の麻薬取締官や、地元の方々がこれに当たった。

自生大麻の中には1m程度の高さのものもあったが、時には3mに成長していた大麻もあり、力仕事となった。特に注意したのは、自生大麻抜去の様子がマスコミの報道されるようになったが、抜去の様子の写真は遠景が映らないよう注意することであった。遠景が映ると、自生大麻抜去の場所が特定され、乱用者が大麻を入手する手段になったからである。

次表は、自生大麻抜去の本数を示した。

自 生 大 麻 抜 去 数					
年度	場所	抜去数	年度	場所	抜去数
S53	94	53,304	S62	118	58,182
S54	102	40,010	S63	96	50,506
S59	104	200,588	H5	35	5,170
S60	130	87,052	H10	33	2,946

このため自生大麻の多い地区には自生大麻撲滅協会（S54.6：小諸市、S55.9：東部町[現東御市]、S54.10：佐久市）を設立、抜去に力を注いだ。

#### ウ 大麻栽培の減少

大麻栽培が減少したのは、麻の繊維の消費が減少しつつあり、その代替え作物に煙草が徳用作物として昭和37年から奨励されるようになった。長野県内の煙草は昭和41年に史上最高の作付面積(1,719ha)を記録したが、昭和50年には煙草の価格改定をきっかけとして、原料の過剰在庫が生じるようになり、昭和53年から減反政策が行われるようになった。この煙草栽培も昭和62年にタバコの輸入自由化と円高に伴い、輸入煙草のシェア拡大し、煙草の強制減反等により作付面積が大幅に減少した。平成16年には廃作募集を実施し、令和元年度の県内の作付面積は13haとなっている。

## 4 大麻取締法の制定について

我が国で大麻の法的規制が行われるようになったのは、昭和5年（1930）の麻薬取締法規則からである。この規則は大正14年(1925)国際あへん会議において、エジプトがインド大麻の乱用による窮状を訴え、国際条約による規制を提案したことにより、第二次あへん条約の締結に伴って制定されるものである。これに伴って、印度大麻草、その他樹脂及びこれらに含有するものは麻薬に指定され、その製造は内務大臣の許可を必要とする他、譲渡手続、容器包装の記載事項、麻薬中毒者等の届け出について規定が設けられた。昭和18年



(1943)に旧薬剤師法、薬品営業並薬品取扱規則、及び前述麻薬取締規則を統合して薬事法(旧)が制定され、麻薬取扱規則は廃止された。昭和20年(1945)連合国軍最高司令官総司令部は日本政府に対し覚書「日本国内ニ於ケル麻薬ノ生産及記録取扱文書ニ関スル制限」を發した。この内容には大麻草も含まれていた。当時、繊維原料(織物、綱、網、帆布など)は無論のこと、神事や茎の皮をむいて乾燥させた「麻幹」(お盆の迎火・送火の材料)、「精麻」(麻の皮を磨き上げた黄金色の麻)、麻縄(祓い串やしめ縄など神事に使う)や懐炉灰に使っていた。また、種子(苧実)は食用や食用油、小鳥の餌に使っていた。このため大麻草の栽培は不可欠であった。再三交渉の結果、この禁止令は解除され、昭和22年(1947)厚生・農林省令第1号をもって、大麻取締規則が制定された。



撮影：長野県内 栽培されている大麻

内容は栽培について国の許可事項でなく、都道府県知事の「免許」を受けて、繊維原料と種子を採取する目的の場合に限り、栽培が許可されることになった。その後は大麻取締法に改正され今日に至っている。現在の栽培状況は、盗難防止対策が行われるなど許可条件が厳しくなり、わずかな栃木県を中心に約4ha弱、栽培農家も30軒ほどとなり、神事専用の栽培が主体となっている。

一方で麻製品が必要な場合もあるため、大麻の主要成分であるテトラヒドロカンナビノールTHCの含有量の少ない麻の品種改良が進み、1982年に栃木県農業試験場の高島大典氏が登録申請した「トチギシロ」はTHCの含有が非常に低いのが特徴で、大麻乱用の対象にならなくなった。

## 5 閑話休題

戦前までは我が国では、麻(大麻)の吸煙習慣は全くなく『大麻取締法』が制定された時も、吸煙する者は殆どいなかった。麻は身近な植物だけに詩歌に昔から良く詠われてきたが、麻を使用する繊維製品がほとんどなくなった。このため、植物の麻を目にする機会もなくなってしまった。

高館の<sup>みたち</sup>御館の跡の 麻島 ゆふかぜ吹きて 麻の葉にほふ 川田順  
麻茂り 伏屋の軒を 見せじとす 富安風生

植物名は、牧野富太郎博士は「外観の<sup>あおそ</sup>青麻が変化したもので、多少緑色を帯びた皮の繊維、即ちソからでた名前である。」と述べている。別名は大麻、漢麻、<sup>かんあさ</sup>美麻、<sup>みあさ</sup>綿麻子、<sup>わたまし</sup>桜麻、<sup>あさお</sup>麻苧、<sup>まそ</sup>真麻、<sup>ちよま</sup>苧麻、さ緒など多く存在するが、時代、栽培地域により様々な呼び方がある。



生薬運搬に使われている麻袋

大麻繊維は現在でも利用範囲が広く、カーペットや麻袋に多く使われている。特に、生薬梱包になくってはならない製品で、現在でも輸入される生薬は麻袋に限られている。

## 6 薬用の利用

医療用への最初の応用は、インドの『アタルバ・ヴェーダ』(BC2000頃)に鎮静剤としての記録が最初で、中国では『神農本草経』(250~280頃編纂)に、麻の花穂「<sup>ふまん</sup>麻蕒」として記述がある。中国の新疆ウイグル自治区では、2700年前に精神活性あるいは占いに用いられたとみられる大量貯蔵された大麻が発掘されたり、2500年前の中国の古代都市の車師(現存しない都市)の墓地からも、花穂の特徴から摂取を目的としたと考えられる大麻が出土している。但し、シャーマニズムの使用は行われなかった。後漢末期の医師華佗(?~208)は大麻を使って麻酔薬「麻沸散」を処方し腹部切開手術を行なっている。

記録ではアルゼンチン(破傷風、うつ病、疝痛、淋病、肺結核、喘息等の万能薬)、ブラジル(鎮静、催眠、喘息等)、アフリカの住民(炎症、敗血症、赤痢、マラリア等)に用いられた記録が残っている。わが国では、民間療法として『懷中妙薬集』(1811)では淋病・便

秘に麻子(麻の実)、『経験千方』(1817)では「胞衣(臍帯を含む胎盤のこと)ノオリザルニ麻ノ根」、『和方一千方』(1890)では便秘に麻子、『奇方録』(1895頃)では麻の葉を用いて元気にする、『万病治癒皇漢薬草図鑑』(1934)では大麻を煙草に混じて吸うと喘息、便秘、月経不順に効あり等いくつかの書籍に記載されている。

明治13年制定された『日本薬局方』第一版に、印度大麻草及び印度大麻草エキスが鎮静や鎮痛、催眠剤として採用され、大正10年(1921)の大幅に改正された第4改正では印度大麻チンキが追加収載され、内服で鎮痛薬や催眠剤に用いるほか、外服で巻煙草にして喘息薬に採用されている。しかし、実際にはあまり使用されず、昭和29年(1954)の第6改正で除された。それ以後収載されてない。



日本薬局方第一版

## 7 大麻の薬理作用

薬理作用は麻酔性の強い「薬用型」と麻酔性が少ない「繊維型」に大別される。薬用型大麻は幻覚物質(テトラヒドロカンナビノールTHC)を含んでいるが、その作用は服用時の方法、摂取量、摂取時の環境、あるいは個人個人の体質に左右される。例えば、吸引した場合その主観作用は非常に早く、経験を積んだものでは数分以内に現れ、持続時間は3~4時間と比較的短い。内服した場合には作用発現は30~60分後で8時間程持続する。身体に及ぼす作用として悪心、嘔吐、口渇、鼻咽頭粘膜の湯きがみられ食欲が亢進する。神経系には触覚、味覚、臭覚が強化され、更に知覚、感覚の変容があげられ、多くの場合実際に時計が示す時間より長く感じたり、空間が実際より広く感じたりする。多量になると幻覚が現れ、精神錯乱する。急性中毒症状では、思考、錯乱、幻視、離人感、妄想、錯乱、興奮、不安等が現れる。この症状は、数時間で消失することが多いが、中には1~3日間持続した例もある。長期常用すれば当然慢性中毒となるが、その症状として睡眠障害、パーキンソン氏患者や大脳萎縮がみられる。後遺症として精神障害が再現することがある。

### (1) 大麻乱用の呼び方

大麻乱用者の間では享楽目的で使われる呼び名は、カンナビス(主に大麻草)、マリファナ(主に乾燥した葉・花・種子・茎)、ハシッシ(大麻樹脂)、ハシシオイル(成分のみ)、ポット(メキシコ系のスペイン語で大麻の葉の意)、ガンジャ(中米で大麻を指すスラング)、メアリージェーン(葉と雌花を乾燥させたもの)、ヘンプ(ハシシより大麻成分が少ない)、420(大麻を象徴する数字で、4月20日は国際的な大麻デーを指す)、グラス(大麻一般)、カンナビス(大麻一般)等で、国によりさまざまな呼び方がある。

### (2) 使用大麻

- ・葉を乾燥して使う
- ・葉や花穂を乾燥して粉碎したもの
- ・葉や花穂を樹脂で固めたもの
- ・樹脂のみを固めたもの
- ・その他である。

### (3) 大麻の使用方法は

- ・煙を吸う方法
- ・そのまま食ベル方法
- ・溶液として飲む方法
- ・樹脂を吸引する方法



大麻草

がある。インドやエジプト等では、樹脂量が多いため樹脂を抽出して塊状として吸引したり、葉や茎を粉碎して調味料・香料を加えて飲物や菓子としての乱用もある。アメリカ大陸の生育する大麻は樹脂量が少ないため煙草の形での乱用が多い。

#### (4) 大麻喫煙器具について

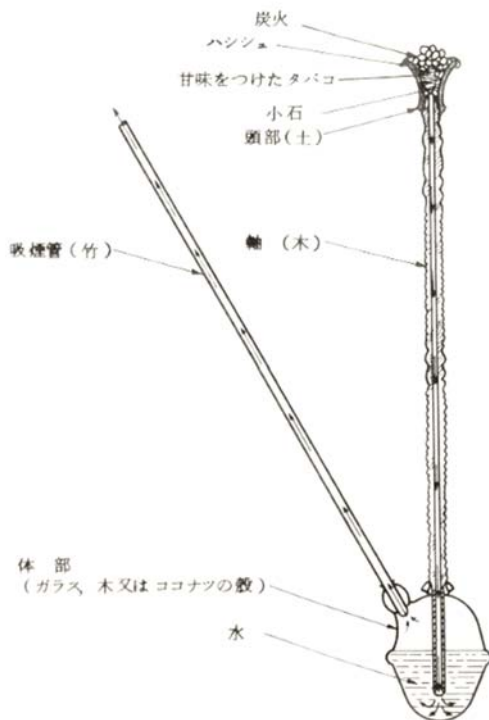
最近、少量の大麻でも吸引効果が出るよう新しい器具が次々と販売されている。インターネットでも容易に入手できるのが現状である。ここでは古くから伝わる器具を紹介する。



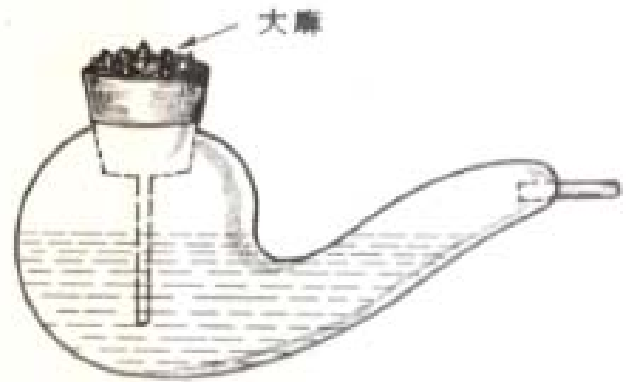
角パイプ (南アフリカ) : 角



チムル(インド) : 土、または木製パイプ



ジョサー(エジプト) : 水ギセル



マリカス(ブラジル) : 水ギセル

大麻の花言葉は「運命」、なんとなくこの植物の姿を現しているようだ。

#### 終わりに

長野県の事例であるが、大麻の種子は非常に発芽率が強く、生命力も強いため10年程度後でも発芽力があつた。繊維収穫の目的で栽培していた大麻が、化学繊維に麻の使用が少なくなると、タバコ栽培がそれに代わつた。このため種子の管理が十分行われなくなったため、一部の地域で毎年大麻が生育してことがあり、最大一日で18万本も抜去したことがあつた。

この抜去に協力した麻薬取締官は「音楽家が作曲に行き詰まり、画家が絵画の表現に行き詰まって大麻を使うことがある。しかし、その音楽を聞いたり、絵画を観賞したりするのは一般の人々である。一般の人々に大麻の力を使った芸術は理解できないはずである。その意味でも大麻を使うことは本当の音楽家でも画家でもない。」と語ってくれた言葉忘れることができな。